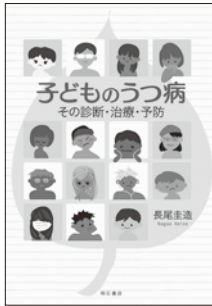


## ■ 書 評



### 子どものうつ病—その診断・治療・予防—

長尾圭造 著  
 明石書店  
 2016年8月 312頁  
 本体価格 3,000+税

本書は、わが国の児童青年期精神医学に長く貢献してきた著者による、自らの幅広い臨床経験や最近の国内外の動向に基づく、子どもの気分障害（うつ病と双極性障害）に関する包括的な実践書である。著者が独自に作成した「うつの重症度 症状一覧表」や「気持ちのお天気表」など視覚的に理解しやすい表の利用法、保護者からよくある質問とその回答例など、著者がこれまで行ってきた工夫を惜しげもなく具体的に紹介している。事例も多岐にわたって詳細に取り上げられている。そのため、本書は、精神科医だけでなく、学校教師や保護者にも有用であり、内容によっては子ども自身が読んで役に立つであろう。カバーの原案は、著者が阪神大震災支援を行っていた頃からともに仕事をしてきた描画療法士によるもので、やわらかで温かみがあり、著者の臨床実践の全体的なイメージと重なる。

子どものうつ病への関心は乏しい時代が続いてきたが、最近では、不登校や自殺の問題などで関心が増しており、精神疾患の予防を含めた児童・思春期からの精神保健活動において精神科医に期待される役割がますます増している。本書では、主に教育との連携に基づく予防活動にまで言及している点が新しい。子どもを取り巻く環境は、学校と家庭が大きな比重を占めており、教員や保護者の精神疾患に対する理解を深めることが重要な課題であり、本書の主眼の1つでもあると言えるであろう。

著者は、総合病院や診療所、そして都市部から

過疎地までの様々な規模の単科精神科病院など、幅広く多岐にわたる臨床フィールドで管理的役割を担ってきたが、そのほとんどに児童・思春期精神科専門病棟はなかった。その中で対峙する様々な病態の子どもの気分障害に対して、小児科医や司法関係まで地域の関連機関との幅広い連携ネットワークを発展させ、いかに苦心しながら治療上の工夫を考えてきたかが、本書から伝わってくる。様々な関係者と連携をとる中で、児童精神科医としての専門性を確立していくために、国内外の知見を広く取り入れながら、症例に向かい、自身でも仮説をたて、それを検証し、さらに新たな仮説を構築するという研究志向的な考えをもって、日頃から臨床にのぞまれていたことがわかる。

児童青年期の精神医学的障害への対応は、医療・福祉・教育など多領域にわたるため、地域特性を考慮しながら、支援のマネジメントを行い、その中で精神科医としてどのような役割を担うかを絶えず検証し続けることになる。残念ながらわが国では、ほとんどの地域に児童・思春期専門の入院施設はなく、今後増える見込みも大きくない。そのため、子どものこころのケアにかかわる精神科医は、孤立しがちで、ともすれば対応が我流になる恐れもある。

本書で紹介されている様々な工夫は、うつ状態に悩む地域の子どもの何とか支えていこうと日々苦心している精神科医にとって非常に役に立つが、本書はガイドラインではないので、読者は、著者が行った対応を参考にこそすれ、必ずしもそのまま取り入れる必要はない。むしろ著者が実践したように、読者の地域の子どもの置かれている状況に即して改変し、さらに、その有用性を検証し、よりよいものをめざしていくことが重要であろう。それは、臨床家が専門性を確立していく過程で、必要となる基本的な姿勢であるが、著者は、本書を通じてわれわれ後輩たちが引き継げるように、温かく応援したかったのではないかと考えられる。

(高橋秀俊)